

# 「ちんすこうりな第二処女詩集について」

馬野ミキ

一年ぶりに早稲田でちんすこうりなにあった時  
俺は前歯を数本失っていたが  
ちんすこうりなは  
俺に前歯があろうがなかろうが  
気にしていない様子だった  
それがこの詩集の1つの根であると思う

冒頭の「詩」は、圧倒的な破壊力と慈悲と意思を同時に秘めている。

-----  
わたしにとって  
すべては暴力で  
わたしは  
すべての暴力を受け入れる  
そして  
なにものも  
わたしを  
傷つけることは出来ない（「詩」より）  
-----

高円寺での自分の音楽のプロモーションビデオの為の録音を終え  
同じく高円寺の無力無善寺に主催しているオープンマイクイベントの終の挨拶に伺うが  
次のイベントがすでに企画されているようで何もきにしていないようだった  
メールであれだけ俺にやめないで去らないでと抵抗していたのに  
何かが埋まっていればいいのか  
穴に  
ライブハウスの経営者にとって日々何かのイベントが埋まっているということは  
意義のあることであろう  
出演者の俺としてはそんなことはどうでもいいけれども  
自分は、

最初の一行がここらに入ってこなければ  
基本的にもうその詩作品を読み進めることはない  
誰もがそのようにテレビのリモコンを扱う  
自分は特に世界そのものから「詩」だけを特別視しない故なおさら  
ちんすこうりなの第一詩集「青空オナニー」はほとんど読まなかった

-----  
勃起した男性器を  
穴に入れて  
こすると気持ちがいい  
ただそれだけのことだ  
人間はばかみたいだ  
そんな簡単なことは  
誰とでもできるよ （「女の穴」より）  
-----

この潔さは何であろうか？  
確かに満員電車には沢山の男女がいるが基本的には誰もセックスをしていない。  
あるいは44歳になっても中学の頃から性欲の変わらぬ自分にとって  
日々の性欲の宛のなさにはほとんど困り果て、時に己の性欲を呪い、失望することもある。  
都会には個室ビデオというものがあり、夏などの繁盛期になると男達がオナニーをする  
ために番号札をもらい  
順番待ちをしている  
夫婦間のセックスレスと少子化はまた現実的な社会問題でもあるが  
彼女のこの詩は、そんな世の性欲事情とはまた別世界に生きている気がする。  
ではちんすこうりなほどよい世界に生きているのか？  
あるいは詩の愛好家だけでなく  
すべての人間に問うてみよう  
私達が一番欲しているものは、愛のあるSEXではなかろうか  
愛のあるSEX  
なんて直接的な世界平和であるのだろう  
SEXをしてとても気持ちいい時、右だの左だの  
原発だって関係ないんだ

-----  
もっと悪いことを  
しなければ  
いけない

してやりたい（「片隅」より）

---

たくさんのホテルの中の一つに  
入るまでの時間が  
一番好き  
バイバイする時が  
二番目に好き（「バイバイ」より）

---

無力無善寺を出て  
中央線の高架下の歌うたいに耳を傾ける  
高音がすばらしく伸びる男がいる  
歌詞も偽りのなさや建設的な部分を両立させようと苦心しているのがわかる  
キヨクで買ったビールを一杯おごる  
彼と高円寺駅前で呑んでいるといろいろな人が彼に声をかけ  
挨拶をしていく  
何者ですか この人は？  
高円寺から練馬行きのバスに乗り  
おっぱぶに立ち寄り  
半年に一度くらいの割合で僕は行くのです  
女の子が少ないのか  
なかなか嬢がつかないので  
ギターケースからちんすこうりなの詩集を取り出し  
暗がりで読む  
本日はバニーガールデイであった  
ちんすこうりなの「おっぱぶ」は好きな詩だ  
あの詩が一番、男というものを（ボーイさん）描けている気がする。  
ちんすこうりなは経験豊かのように見え、すれていないし  
実際ウブである。  
「女の子のためのセックス」  
俺にはそれほど彼女が、男や女について知っているように思えず  
この詩集のタイトルは「女の子のためのセックス」ではなく  
「私のためのセックス」というのがふさわしいのではないかと思った。  
「バイバイ」を読むと、  
実は彼女が、セックスをしている時が一番に好きな時間でもないのだということがわかる。  
だとすれば一体彼女は何を求めているのか  
そしてそれはすべての読者

転じて人類への問いであるとも言えるかも知れない  
詩集とは、本来詩の愛好家たちのものではないと俺は思っている  
詩集とは、ポエジーからもっとも遠くかけ離れた人へ働きかける数行であろう  
ちんすこうりなのこの第二詩集は  
そういった一步を確実に踏み出していると俺は思う  
編タイトを履いた猫耳娘が俺の隣にすわる  
当たりの子である  
キャバ嬢やガールズバーなんかでもそうであるが  
話のとっかかりも半分あるだろうけれど  
結構ギターに反応する  
俺が有望なミュージシャンであるのかどうなのかという  
探りをいれてきたりもする  
「どんなジャンルやってるんですか？」  
「俺は詩人だからすべてのジャンルをやる」  
「JPOPも？」  
「うん」  
「J文学も？」  
「うん」  
「Jリーグも？」  
「うん」  
おっぱぶでは、20分に一度店のBGMと照明が変化し  
おさわりタイムというものがある  
嬢が服を脱ごうとするのでそのままいいよと俺は言う  
そして手をつないでハイボールを飲む  
いい女と一発やりてえという  
いわゆる男達の思想は俺にとって1つの謎だ  
精子がでたあとにも、ちゃんと俺を守ってくれる女性が俺は欲しい

1973年生。歌手、作家。  
詩集に「子供の晩年」（白昼社）、「下敷きで光を」（ポエトリージャパン）。  
シンジュクスポークンワークススラム2代目グランドチャンピオン、ポエトリースラム  
ジャパン2017東京大会優勝。  
2017年6月まで、蛇口、ちんすこうりな(チン・リー名義)とブログ「詩と惑星」を共  
著。  
現在、ブログ「ハローワークスーパースター」を更新中。 [http://under-  
poet.blogspot.jp/](http://under-poet.blogspot.jp/)